はじめに

東京美術学校は明治三十一年の岡倉覚三校長辞職、美術学校騒動の後、高嶺秀夫、久保田鼎両校長時代の動揺期を経て同三十四年に至り正木直彦を校長に迎え、専門学校としての教育体制確立に向かう。本巻の範囲は明治三十二年から大正八年までの二十一年間である。正木校長が辞任した昭和七年までを含める方が自然であるが、紙数の関係上、大正八年、つまり、東京美術学校改革運動後の諸改革が進み、美術界に帝国美術院が登場した時期で一区切りとする。

本巻の構成は第一巻とやや異なる。それは、この時期には準公式記録とも言うべき『東京美術学校校友会月報』の刊行があり、前の時期とは比較にならないほど詳細にものごとの推移を把握できるため、その記事を大幅にとり入れたからである。「東京美術学校年報」の記事を根幹とする編年体の構成は前巻と同様であるが、これに月報記事を加えるため、年報については甲款の本文のみを掲載し、甲款の表（教官事務官表、嘱託員表、雇員及傭人表、非職及休職員表、生徒表、生徒卒業後ノ状況、土地表、建物表）および乙款の本文と表（経費表、資金表、備品価格表）は一覧にまとめて掲載した。また、授業内容については章を設けず、代わりに補遺篇の項を設け、ここに第一巻脱稿後収集した資料のうちの重要なものを掲載した。

なお、資料について附記すれば、上記の校友会月報は正木直彦が校長に就任した翌年の明治三十五年六月に創刊されて以来約三十年間、東京美術学校内外の出来事を間断なく報道し続け、正木が退官し、赤間信義学校長事務取扱を経て和田英作が校長に就任した昭和七年の十二月に第三十一巻第六号の発行をもって廃刊された。創刊に際して正木が企図したとおりに、本誌は今日では東京美術学校のみならず美術界の変遷をも詳細に物語る記録資料としての価値を持つに至っている。

それとともに本書編集上特に負うところが大きいのは「諸新聞切抜」（本学附属図書館所蔵）である。これは諸新聞に掲載された美術関連記事を切り抜いて貼り込んだもので、岡倉天心が校長に就任した翌年の明治二十四年から沢田源一が校長となった翌年の昭和十六年までの間作成が続けられた。三五一冊現存しており、これらはわが国の近代美術史に関する極めて貴重な資料である。東京美術学校が以上のような記録文献を後世に遺してくれたことに対して、編者は敬意と感謝の気持を禁じえない。